

手賀沼が海だったころ



松ヶ崎城跡植樹後15年

1. 晩秋にも咲いた松ヶ崎城跡の河津桜

毎年2月下旬から3月にかけて、河津桜の花見に市民が多数来る松ヶ崎城跡ですが、昨年12月に以下の記事が新聞に載りました。

「柏市の指定文化財である中世の城跡、松ヶ崎城跡（同市松ヶ崎）で、一部のサクラが開花している。28日には青空の下、1本のサクラが、桃色の花弁を風に揺らしていた。

市によると、サクラは市民らにより植樹された河津桜で、開花は例年、2月下旬～3月上旬。城跡は発掘調査後、説明板を設置し自由に見学できるようになっている。

この秋は気温が平年より高い日が多く、ほかにも花を咲かせるサクラがあるという。開花を見たという市内の造園業の男性は『もうすでに春だと思っているのではないか』（朝日新聞 東京地方版 2024年12月1日）。

最近は温暖化とともに、

冬から春にかけて寒暖差も大きく、桜の開花時期も一定ではありません。今年は寒の戻りもあって、開花時期が遅かったようです。

昨年3月には、他団体の主催ですが、松ヶ崎城跡で音楽イベントも開催され、何組かの歌手やバンドが歌や演奏を披露し、キッチンカーまで出動しました。今春も陽気の良い日には、結構な人出となっています。

年に行った松ヶ崎城跡への植樹が初めてといえるでしょう。

2008年にいったん杉などの針葉樹が伐採された松ヶ崎城跡は、木がまばらな場所になりましたが、それでは勿体ないので河津桜などの広葉樹を植えて、環境を整えよう、こうした木々にしっかり根を張ってもらって斜面も保護しようという話になりました。

既に当会は2002年6月に柏市長に保存の要請書を提出、さらに「松ヶ崎城址及び周辺森林の保存のお願い」の署名を集め、翌2003年2月に柏市議会に請願、採択されるなどの活動を行ってきましたが、2010年には環境保護のための植樹を行うことになったのでした。



<2024.3.9 松ヶ崎城跡で開催の音楽イベントにて>

2. 河津桜の植樹にこめた松ヶ崎城跡保存への思い

思えば当会には、1999年9月26日発足当初から自然観察に関心のあるメンバーおりましたが、環境保護として広く知られる活動をしたのは、2010



<2006年当時の松ヶ崎城跡（西側虎口から堀を望む）>

手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会会報

2025年3月31日

第52号

以前は松ヶ崎城跡は一面がうっそうとした杉林でした。ただ、松ヶ崎不動尊絵馬などをみると、松ヶ崎城跡には明治初年くらいまでは松が生えていたようです。「松ヶ崎」という地名も松が生えていた岬状の地形に由来するものと思われます。ですから、杉の木も植樹されたものだったのですが、杉林だった松ヶ崎城跡を「トトロの森」という人もいました。そうしたものに戻すのかというの議論が分かれると思いますが、うっそうとした林ではなく、ある程度日が入り、市民の方々が散歩したりできるような、憩いの場所にしたいという意見が多かったように思います。

なお、杉林だった頃は、城跡にゴミが結構捨てられていましたが、里山として認知され、人が散歩しにくるようになると、ゴミは格段に減りました。



＜今年も満開の河津桜＞

3. 2010年からはじま った植樹

さて、具体的な植樹についてです。柏ロータリークラブも松ヶ崎城跡の保存に関心を示し、植樹を行う意向で、ロータリークラブはボイスカウトとタイアップして、城跡のある台地上に、城跡の遺構である土壘や堀、郭の中などは避けましたが、その他の部分は間隔をおいて木々を植えていました。その時期は2010年2月11日

で、河津桜、カシ、コナラなどの樹木を70本ほど植樹したものです。その際、ロータリークラブ関係者、ボイスカウトなど250名ほどが参加し、当時の秋山浩保・柏市長や当会の川上利男会長代行（故人）も来賓として参加しております。

同年2月28日には柏市と当会がタイアップして、河津桜50本の植樹を植樹樹木の里親の会を組織して、植樹祭のセレモニーとともにに行うことになって

松ヶ崎城跡 樹木の里親制度 植樹祭！

柏市指定文化財松ヶ崎城跡を花と緑のある史跡とし、市民の憩いの場とするために樹木の里親を募集し植樹祭をおこなうこととなりました。

松ヶ崎城跡は、1万年前の縄文早期から弥生時代の土器が発見され、古墳や平安時代の住居跡、中世の城跡、江戸時代の寺社跡などがある歴史的遺産です。

今回里親として参加されなかった方もどうぞ一緒にご参加ください。

植樹の日：平成22年2月28日(日)
10時～12時 見学会も行います。



雨天の場合中止いたします。当日朝7時決定

*植樹祭中止の場合、その後の植樹は柏市の管理下で責任を持って行います。後日それぞれで訪れてみてください。

ところ：松ヶ崎城跡（柏市松ヶ崎457-1）アサヒビル工場北側
北柏駅O1番北柏ライフタウン柏櫻 竹ノ台下車徒歩5分



里親の種類及び本数：河津ザクラ50本程度

*4月以降に看板を設置し、樹木の「里親」として参加いただいた皆様の氏名を連名で記載させていただく予定です。

主催：手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会 開い合わせ * 寄える会

*柏市生涯学習部 文化

＜松ヶ崎城跡植樹祭（雨天で中止）のチラシ＞

いましたが、雨天のためにセレモニーは中止、河津桜の植樹自体は翌日の3月1日に造園業者によって行われました。

直径3cmほどの河津桜の苗木は、15年の歳月中で順調に成長し、中には直径が20cmを越えて、どっしりした幹に太い枝ぶりとなった木もあります。



＜幹も太く成長した河津桜＞

その後、柏市長に対する植樹樹木里親の会からの植樹樹木の目録贈呈や樹木里親の記名板の設置および除幕式なども行いました。

2011年3月27日のシンボルツリー植樹では、東日本大震災の直後でもあり、植樹祭は行いませんでした。しかし、ロータリークラブ関係者などのご協力のもとで、台地中段にカツラの木を一本植樹し、前

後して倒木の整理やクローバーの植え付けなど各種整備を行いました。



＜シンボルツリーの植樹＞

改めて植樹祭を行ったのは1年後の2012年3月25日でした。その日に当会が主催、柏ロータリークラブ、ボイスカウト東葛地区協議会、柏市ガールスカウト連絡協議会のご協力で、植樹式を行ないましたが、当時の教育長にもご列席頂き、参加者は約80名でした。

4. 遺構も環境も次世代へ

2013年以降も、植樹はひと段落したものの、柏市は城内の通路を階段部分も含めて整備し、毎年草刈りを行っていますが、当会も樹木里親の会としてバス通りに面した台地中段に「松ヶ崎城跡」の看板を設

置したり、「カシニワ」の活動（主にカシニワ・フェスタでの見学会）を継続してきました。

松ヶ崎城跡の文化財としての遺構とともに、城跡と周辺の自然環境も残すことが重要だと思います。松ヶ崎城跡には、城の遺構を見るのを目的に来る人と自然観察、散策に来る人などがあります。里山としての松ヶ崎城跡に散策に来る人は近隣の人が多いと思います。桜のシーズンだけ来る人も多いでしょう。そういう人にも松ヶ崎城跡が500年も前の遺跡で貴重な文化財だということを知って頂きたいと思います。多くの人に松ヶ崎城跡に来て頂き、歴史と自然に触れて頂いて、城跡が自然とともに次世代に継承されることを強く願います。



(文：編集部、写真：荒井辰男ほか)





柏飛行場と戦争遺跡（前編）

森 伸之

（1）柏飛行場の役割とその変遷

柏飛行場は日中戦争当時に開設された陸軍の飛行場であり、「首都防衛」の役割をもっていた。アジア・太平洋戦争末期においては、ロケット戦闘機秋水の基地となりつつあった。

千葉県の旧軍航空基地は、海軍については東京湾に面した広大な敷地をもち、渡洋爆撃などの基地となつた木更津海軍飛行場をはじめ、やはり東京湾に面し、房総半島の突端に位置する館山海軍飛行場および洲崎海軍飛行場、また九十九里沿いの干潟には香取海軍飛行場、さらに茂原海軍飛行場と房総半島の東西南の要所に配置され、館山海軍航空隊が昭和5年（1930）開隊と早いが、他は日中戦争開戦の昭和12年（1937）前後から太平洋戦争中に開設されたものである。

日中戦争の火蓋が切ら

れる直前の昭和12年（1937）6月、かねて首都東京に近い場所に新たに「首都防衛」の飛行場を求めていた近衛師団經理部が、新飛行場を当地（当時の東葛飾郡田中村十余二）に開設することを決定した。地元でも誘致の動きがあり、田中村の松丸巖村長が斡旋するなどして、約55万坪という用地買収は同年中に終了した。この用地のなかで、多かったのは花野井の吉田家のものという（昭和14年（1939）3月17日の近衛師団經理部長野副鶴吉による「近經營第一八三号 柏陸軍飛行場其他敷地買収済ノ件報告」では、買収総面積は653,640坪となっている。JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C0100717450 O）。

翌昭和13年（1938）1月には、飛行場建設が着工、同年秋には完工し、当地に陸軍東部第百五部隊の飛行

場、すなわち柏飛行場が開設された。ここに、田中村、八木村にまたがる約145万平米の敷地と、1,500m滑走路1本の柏飛行場が誕生したのである。

同年11月29日、陸軍飛行第五戦隊が東京立川町から移転して来た。これは同年8月31日、飛行第五連隊を改編、飛行第五戦隊となったものである。また陸軍飛行第五戦隊が立川から移転したのとほぼ同時期の同年12月に、陸軍航空廠立川支廠柏分廠が設置された。柏分廠の落成式、歓迎式は、翌昭和14年（1939）4月26日に諏訪神社で行われた。

なお、柏の歴史で柏飛行場に駐屯した部隊を「東部第百五部隊」というが、実はこの飛行第五戦隊のことである。当時の飛行第五戦隊の戦隊長は近藤兼利大佐^{（注1）}で、近藤戦隊長はのちに中将にまで昇進し、飛行第一〇師団の師団長になった。この飛行第五戦

隊の保有機は、当初九五式戦闘機、昭和15年(1940)9月には九七式戦闘機に変更され、昭和17年(1942)3月以降の主力は二式複座戦闘機である屠龍であった。

柏市高田出身で戦時中は学徒出陣で中国大陸に出征していた元陸軍少尉のT氏(終戦時20歳)が語るところによれば、少年の頃よく柏飛行場に飛行機を見に行つたが、九七式戦闘機、九七式司令部偵察機、九五式の二枚羽の練習機を見たという。T氏が見たのは、年代と機種からみてこの飛行第五戦隊のものであったと思われる。

この最初に柏にやってきた飛行第五戦隊は昭和18年(1943)7月、ジャワ島マランに移り、周辺のチモール・ラングーン・バボに中隊を展開して輸送援護や防空に従事した。



＜所沢航空発祥記念館に展示されている九七式戦闘機の模型＞
昭和16年12月初頭の

飛行第五戦隊は戦闘中隊2、飛行場大隊1で、九七式戦闘機25機という防空体制(『本土防空作戦(戦史叢書)』(1967)p.98)という兵力であった。飛行第五戦隊は昭和17年(1942)末には戦闘三個中隊となつたが、前記の通りジャワに転出し、その代わりに飛行八七戦隊が柏に移動するが、半年足らずで、これも転出。その後柏飛行場には、飛行第一戦隊、同第一八戦隊、同第七〇戦隊と、駐屯部隊の変遷はあったが、松戸、成増、調布などと共に、柏の部隊も昭和19年(1944)末から激しくなった米軍B29などによる空襲に対し防空戦闘にあつた。当会は2013年に飛行第一戦隊の元隊員(整備隊の大尉と幹部候補生の機関工手の2名)から聞き取りを行つたが、隊員は全部で400名ほど、うち空中勤務者は40名程度で保有機も同じくらいであったという。また飛行第一戦隊が柏に駐屯していた当時は、飛行場周辺に掩体壕などは作られていなかつたようである。

飛行第一戦隊は昭和16年(1941)11月より南

方進攻作戦に伴い、シンガポール、ラバウルに進出したが、昭和18年(1943)9月に内地帰還、11月には一時旧満州に移動するも、すぐに首都防衛のため柏飛行場に転じ、昭和18年(1943)11月から柏に展開した。飛行第一戦隊は、柏飛行場では昭和19年(1944)4月に保有機を一式戦闘機隼から四式戦闘機の疾風に変更し、また九州の雁の巣飛行場に一時移動し防空につとめた。昭和19年(1944)10月8日、捷号作戦により、飛行第一戦隊はフィリピンへ進出するが、レイテ攻撃戦の中で戦力を急速に失い、戦隊長松村俊輔少佐が10月28日払暁出動時の離陸事故でなくなり、各中隊長の多くも戦死、10月末には壊滅に近い状態となった。

飛行第一八戦隊は三式戦闘機、飛燕を装備していたが、B29の夜間攻撃に対抗するための訓練で事故を起こし、夜間訓練は中止となった。飛行第一八戦隊の戦隊長磯塚倫三少佐以下は主力は、米軍がフィリピン・レイテ島に昭和19年(1944)10月20日に上陸した直後の11月

11日、フィリピンに向かい、フィリピン・レイテ戦に参加したが、日本軍は海軍のレイテ沖海戦も含めて一連の戦いに敗退、12月19日には遂にレイテ島を放棄せざるを得なかった。飛行第一八戦隊残置隊は五式戦闘機（キ-100）へ保有機種を変更し、昭和20年（1945）6月に松戸へ移動、米軍機邀撃を続けた。

飛行第一八戦隊主力を入れ替わりに、坂戸篤行大尉（終戦時、少佐）を戦隊長とする飛行第七〇戦隊が柏飛行場に来たのは、昭和19年（1944）11月7日である。

この戦隊の主な保有機は、二式単座戦闘機、鐘馗であった。坂戸戦隊長は、飛行第一八戦隊残置隊も指揮下に置いた。飛行第七〇戦隊は、松戸から柏に移る前は、旧満州の鞍山にあって、B29との戦闘を経験していた。そのため、師団からの期待も大きかったが、この飛行第七〇戦隊は、昭和19年（1944）の終わりから翌年初頭にかけて、B29への正攻法での攻撃をあきらめた師団によってB29に対する空対空体当たり特別攻撃隊、震天制空隊

を編成せられた。

これは、戦争末期（昭和20年（1945）初頭頃）に柏や松戸などの戦隊の上位組織、第一〇飛行師団隸下の各飛行場で結成されたもので、高高度戦闘は性能上相当困難で、師団は各戦隊より四機あて、無線機と酸素のみで武装を外した、B29への体当たり専門の特攻隊を編成させたのである。

B29のような高高度を飛び敵機を容易に迎撃できず、高射砲も届かないことから、B29に対して、老朽化した戦闘機で体当たりして落とす無謀な戦法であり、体当たり直前に操縦員は戦闘機から脱出するという曲芸のような技術を要し、軽量化のため防弾板や機銃ときには無線まで外すという人命軽視の愚策であった。

以下に松戸飛行場に駐屯していた飛行第五三戦隊が編成した震天制空隊の写真を掲げるが、これは機体に鏑矢を赤く描いた屠龍である。鏑矢は、以下の楠木正行の梓弓の和歌にちなんだものである。



複戦丁型屠龍>
画像は Wikipedia より

帰らじと かねて思へば
梓弓 なき数に入る 名を
とどむる

楠木正行

屠龍の機体に描かれた鏑矢は、歌に出てくる梓弓から足利の大軍に見立てられたB29の群れに向けて放たれ、生還を期せず迎え撃つとの決意を表しているのであろう。

しかし、彼我の飛行機の能力の格差を埋める非常手段として、「体当たり」による特攻が選択され、戦闘機から武装やパイロットの生命を守る防弾板を外し、脱出できるかどうか分からぬ「体当たり」をさせたのであるから、これは乗員の生命を軽視した論外の策といわざるを得ない。その機たるや、損耗しても惜しくないような老朽機であったのである。機体ごと、体当たりする衝撃は、大変なもので、我々には想像もできない。「体当たり」後に脱出することは、ほぼ不可能であるし、その前に、乗っている機から脱出することも難しい。

震天制空隊には、飛行第七〇戦隊では小林茂少尉以下、4名が指名された。実際に人命を軽視するその方針のもと、他の戦隊機とともに、昭和19年(1944)12月27日の東京の中島飛行機武藏工場への空襲でB29への体当たり戦死が報告されている。

翌年昭和20年(1945)2月16日、17日には、グラマン、アベンジャーを主体とする米艦載機による大空襲があり、邀撃が行われたが、2月17日の空中戦で河野渕水大尉が厚木上空でグラマンと交戦中に被弾、横須賀市市街地に落下の際、自分の名入りの航空手袋を地上に落とし、市街地を避けて東京湾に墜落、自爆した^(注2)。他にも軍曹二名が、同日の戦闘で戦死している。

この戦隊は、艦上戦闘機を含む米軍機による空襲への邀撃で隊員と保有機を減耗しつつ、昭和20年(1945)6月に機種を四式戦闘機、疾風に変更、8月10日にP-51群の来襲に対して緊急離陸直後に本多寛嗣大尉が直撃され戦死するなどの戦闘があったが、終戦まで柏に駐留した。

なお、当飛行場に配置された各飛行戦隊は、昭和19年(1944)3月以降、第一〇飛行師団隸下にあり、師団長は昭和20年(1945)2月に空襲での大きな損耗の責により更迭されるまでは、吉田喜八郎少将(陸士29期)で、昭和20年(1945)3月からは前述の近藤兼利中将(陸士26期)となった。また、飛行場には、同じ師団隸下であるが、飛行戦隊とは別に飛行場大隊が駐留し、飛行場の警備や整備、必要資材の調達などを担当した。

柏飛行場に兵員は600～700人配備されていたといわれているが、戦隊の入れ替わりが激しくその数はつねに変動していた。昭和20年(1945)初頭の戦力は、二式単座戦闘機鐘馗が約40機、三式戦闘機飛燕が約15機であった。

防衛省防衛研究所所蔵の『本土航空作戦記録』によれば、昭和20年(1945)7月の本土防空戦力は全国で「固定防空戦闘兵力」が219(機)、「機動戦闘兵力」153(機)で、東部(第10飛行師団)の「固定防空戦闘兵力」が

95(機)、関東の「機動戦闘兵力」は66(機)であるから、関東地方は合計161(機)、鈴鹿以東の東海地方の計72(機)を足した東本州で233(機)となる。うち柏は「固定防空戦闘兵力」として一八戦隊のキ100(五式戦闘機)が12(機)、七〇戦隊の二式単座戦闘機鐘馗29(機)の合計41(機)が現に出動可能とされた。

前出『本土航空作戦記録』では柏飛行場が属する第一航空軍(鈴鹿以東の東本州を担当)の「第一航空軍決号作戦計画大綱」(昭和20年4月策定)には、「航空軍ハ全軍特攻精神ニ徹シ本土就中関東地方ノ防空ニ万全ヲ期ス」とあり、その配下には特攻機約600機、一般機約500機を配置するとしているが、同年7月の東本州の現出動可能兵力233機はそれを大幅に下回っており、3か月前の計画に対して保有機が大きく損耗したのであるか。なお、同書では西本州を担当する第六航空軍は、特攻機約1000機、一般機約400機を配置するとしている。それにしても特攻機、別のページで

は「と号機」と表記された戦闘機は、いかなるものであろうか。

『本土航空作戦記録』では「と号機及と号隊要員ノ整備ハ航空総軍ノ計画ニ依ル」として明確に記載していない。ロケット戦闘機秋水は、間違いなく「と号機」であると思われ、その搭乗要員の育成も、意識されていた筈である。

柏飛行場は、1,500mの滑走路と周辺設備を保有し、太平洋戦争末期に開発されたロケット戦闘機「秋水」の飛行基地も、この柏飛行場が割り当てられた。その際の実施部隊としては、飛行第七〇戦隊が想定されており、昭和20年(1945)7月には操縦者全員の身体検査も行われたが、実運用は出来なかった。

(注1)近藤兼利は陸士26期、昭和13年(1938)6月陸軍飛行第五連隊長、後に明野陸軍飛行学校幹事、宇都宮教導飛行師団長などを経て昭和20年(1945)3月第一〇飛行師団長、陸軍中将となる

(注2)河野涓水(陸士54期)は、昭和20年2月17日に戦死し、陸軍少佐に特進 JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. A12090758400

【 次号に続く 】

お知らせ

<2025年度当会総会について>

日時： 2025年4月27日（日） 11時より12時頃まで

場所： アミュゼ柏 会議室A

議題： 2024年度活動実績、会計報告、2025年度事業計画、予算案、体制案
(なお、当日ご参加できない方のために葉書による議決も並行して行います)

<4月27日当日開催 2025年度第1回歴楽講座>

日時： 2025年4月27日（日） 13時より15時頃まで

場所： アミュゼ柏 会議室A

内容： 発掘調査で分かった千葉県城郭の新事実

参加費用： 300円 (資料代他)

<会誌『水辺の城』第9号発刊について>

本年7月発刊を目指し、鋭意作成中

寄稿いただける方はご連絡願います

⇒ メールは info@matsugasakijo.net まで

・テーマ：地域（東葛以外でも構いません）の歴史・自然、文化財等に関するもの（論文、紀行文、エッセイ他）、個人の近況、イラスト、写真など

・期限：2025/5月末、分量：A4で1枚～30枚程度

手賀沼が海だったころ

手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会会報 第52号 2025.3.31

編集・発行人：森 伸之

年会費2千円 振込先：千葉銀行 柏支店 普通 口座番号3461475